

California Press, 1992, が参考になる。

- (2) 例えば、天児慧・加藤千洋『中国大陆をゆくー近代化の素顔ー』、岩波新書、1990年、の「おわりに」参照。
- (3) 「社会主義的發展途上国」という言い回しは、岡部達味氏によってしばしば使われている（岡部達味『中国は近代化できるかー社会主義的發展途上国の苦悩』、日本経済新聞社、1981年）。
- (4) 天児慧『歴史としての鄧小平時代』、東方書店、1992年、6-7ページ。
- (5) 「鄧小平同志在武昌、深圳、珠海、上海等地的談話要点」『華僑日報』（香港）1992年3月15日所収（邦訳、『旬刊 中国内外動向』第16巻第10号、ラヂオプレス、B5-6）。
- (6) 同上、B13-14。
- (7) 『読売新聞』1992年3月10日、『朝日新聞』1992年3月26日。
- (8) 『読売新聞』1992年4月2日、『朝日新聞』1992年4月3、4日。
- (9) 『朝日新聞』1992年3月5、14、20日、『読売新聞』3月13（夕刊）、24日、4月12日。
- (10) 『朝日新聞』1992年4月18日。
- (11) 『朝日新聞』1992年5月2日。
- (12) 「国務院可關於成立生産辦公室的通知」『中華人民共和国国務院公報』1991年第27号、972-974ページ。朱鎔基はこのとき、これ以外にも国家安全生産委員会主任、国家無線電管理委員会主任など、国務院内に設置された5つの非常機構の責任者となった（『中華人民共和国国務院公報』1991年第23号、835ページ）。
- (13) 「国務院成立經濟貿易辦公室」『人民日報』1992年6月12日。
- (14) 「国家計委從八方面轉變職能」『人民日報』1992年9月25日、「国家計委推出重大改革步驟」『人民日報』1992年9月26日、「国家計委將如何轉變職能」『人民日報』1993年1月17日。
- (15) 江沢民「加快改革開放和現代化建設步伐 奪取有中国特色社会主义事業的更大勝利ー在中国共产党第十四次全国代表大会上的報告」『人民日報』1992年10月21日（邦訳、『北京週報』1992年第43号）。

国分報告に対する代表質問

日本国際問題研究所

小竹一彰

国分教授の報告に対して全体として共感をおぼえたということを、まず申し上げたいと思います。したがって、中国の現状についての指摘に対して根本的に異論があるわけではありません。むしろ、中国に対する研究関心が徐々に変化してきた報告者の述懐には、人それぞれに独自の経過をたどっているものの、似たところもあると感じました。

そういうわけで、報告でふれられたいくつかの論点について報告者の考えていることをさらに明らかにしてもらうための質問をし、また報告で当然言及すべきなのにそうしなかった問題を指摘したいと思います。毛沢東時代の位置づけを、まず問題にしたいと思います。報告では、毛沢東時代を改革以前の時期であり、正統的な社会主義理論にかなり忠実だったと指摘したと思います。

しかし、毛沢東がソ連から直輸入された社会主義制度の欠陥を中国では最も早く意識し、それからの脱却をはかったことは、よく知られていることでしょう。毛沢東時代の経済体制と経済政策を研究している方々は、毛沢東時代にすでに現在の改革の先駆と評価できる動きがあった、あるいは改革は毛沢東時代から始まっていたという研究成果が提出しています。こういう分析結果にはかなりの説得力があると私は考えています。つまり、正統的な社会主義理論とそれにもとづく中央集権的な社会主義制度に対する批判は、毛沢東時代から始まっていた。この批判にもとづく中央集権的制度の修正も一定程度行われていたわけです。したがって、毛沢東

時代の評価は報告でのべられたよりも複雑ではないか。そういう毛沢東時代を的確に評価しなければ、鄧小平時代の意味も明らかにできないのではないかと思います。

同じことは、毛沢東時代の中国が国際システムとの関係では現状変革勢力だった報告された点についても言えるのではないのでしょうか。毛沢東時代の中国が国際システムに対して敵対的な態度をとったことがあることは否定できません。特に「文化大革命」中は国際システムにおける当然のルールを拒否した過激な行動をとりました。しかし、「平和共存5原則」などに見られる中国の主張は、既存の国際システムを否定するものだったと断言できないと思います。毛沢東時代にも国際システムとの協調を願っていたが、国際システムの主流派だった側が中国を受け入れなかっただけなのではないか。当時の中国が見せた現状変革的な態度とは、意図的というよりは結果的なものにすぎなかったように考えられます。

なお、毛沢東時代について報告では「全体主義的な体質」と表現し、全体主義そのものではないと発言されましたが、その意味をもう少し具体的に説明していただきたい。

また、鄧小平が1992年1月に行い、中国の政治的・社会的雰囲気の変換に大きく貢献したと思われる南方視察の理由と評価について、指摘したいことがあります。それは、なぜこういう行動を鄧小平がとらざるをえなくなったのかという問題です。1988年秋に始まり、1989年の天安門事件以降強化された経済の「整理・整頓」の結果と深く関わっている、と私は考えています。「整理・整頓」は何をもたらしたのか。中国経済の沈滞と、それにとまなう社会不安の増大が全国的に発生したと思われます。このような情勢を放置しておく、中国の支配体制を維持することそのものが危うくなるという危機感

を強めた人々が増えてきた。その代表者が、たとえば鄧小平だった。この考え方を強めたのが、1991年8月のソ連のクーデター失敗からその年の末のソ連の解体にいたる過程だったと思われます。彼らは、いわゆる2号文件で鄧小平が強調したように、社会主義制度の堅持にこだわるのが共産党の支配体制の存続も不可能にしてしまうと主張したのです。鄧体制の維持に対する危機感が正統とは見なされない政策を大胆に採用させるというパターンには、先例があります。1978年の11期3中全会における毛沢東路線から鄧小平路線への転換です。その時も、毛沢東路線をこれ以上継続すれば、共産党の支配体制を維持できなくなるという危機感によって、論者によっては「百八十度転換」と表現するような事態が発生しました。1992年の鄧小平の南方視察前後の動向も、政策変更のパターンという観点からは、1978年の場合とよく似ていると思います。中国でも鄧小平の南方視察を大きく宣伝するなかで、78年の転換との類似を指摘する議論がいくつか出ました。本家本元の中国の方が、岡目八目の日本よりも当面の状況に対する危機感を自覚していたわけです。

こういう危機感が鄧小平の南方視察以来の政策転換の背景に存在したことを重視すべきだと私は考えます。この点を見落とすと、鄧小平の南方視察の際の談話の意義を理解できなくなるのではないのでしょうか。

それから指摘しなければならないことは、1997年が中国にとって持つ意義です。つまり、香港返還は中国の政治、さらに文化にどういう影響をあたえるのかという問題です。これには、もちろん、1999年のマカオ返還もふくみます。元来、香港返還は台湾との再統一にいたるステップとして位置づけられていたはずですが、しかし、現実には台湾との再統一が香港返還に続いて速やかに実現する可能性はほとんどなく

なっていると思います。

そうだとすると、香港返還のもつ歴史的意義がかえって非常に大きくなるのではないのでしょうか。つまり、19世紀半ば以来、帝国主義に侵略されて領土を奪われてきたという中国の屈辱の歴史が香港返還により終了するわけです。これは同時に、奪われたものを回復するための現代中国の反帝国主義的ナショナリズムの役割が、終了するとはいわないまでも、変質せざるをえないはずです。

その結果、いかなる事態が発生するでしょうか。現時点で予測することは困難ですが、注目に値する問題です。ただ指摘できることは、帝国主義に包囲されているという意識が中国の国家統合にプラスの効果をもっていた時代が終わるだろうということと言えます。あるいは、帝国主義の侵略の記憶が国家の凝集力になっていた時代が終わるわけです。中国の国家統合のあり方が変化せざるをえないと思います。おそらく、国家の紐帯が弱くなるのではないのでしょうか。

これに関連していえば、中国における連邦制の問題に報告者がふれなかったのは意外でした。確かに、1989年の天安門事件以来、連邦制は中国大陆ではタブーになっています。しかし、中国の将来の国家統合を考える際に、連邦制の問題は有力な選択肢でしょう。中国の政治についてこれだけ詳しく報告されたのなら、ぜひ連邦制の問題にもふれてほしかったところです。

以上、報告に触発されて思いつくままにいくつかの問題をとりあげました。なんらかの問題提起になっているとすれば、幸いです。